

教員氏名：山本 佐江（児童教育学科・児童教育専攻／准教授）

### 1. 教育の責任（何をやっているか）

児童教育学科に所属し、主に小学校教員をめざす学生のための授業担当であるが、同時に保育士・幼稚園教諭をめざす学生や、中・高の保健体育の教員をめざす学生、または全く教員を志望しない学生など、幅広い対象の授業を担当している。そのため、乳幼児から高校生までの成長・発達を見通したカリキュラムが必要である。教員採用試験に向けては、担当者の補助的立場として学生の面接指導を随時行っている。また、学生会担当として、学生の自治的活動を側面から支援している。さらに、IPU・環太平洋大学次世代教育学部教育経営学科通信教育課程にて、教育経営学を担当している。

|          |          |   |
|----------|----------|---|
| 育英大学教育学部 | 児童教育学科   | 教育課程論（幼・小）、教育方法論（幼・小）、国語、初等教科教育法（国語）、     |
|          | スポーツ教育学科 | 教育課程論（中・高）、教育方法論（中・高）                     |
|          |          | 日本語教育Ⅲ（発表・討論）教育学研究法Ⅰ、教育学研究法Ⅱ、総合ゼミ主担当、基礎ゼミ |

### 2. 教育の理念（なぜやっているか）

#### ウェルビーイングをめざすスチューデント・エージェンシーの発揮

新しい教育概念であるウェルビーイングの実現をめざし、未来の社会をつくり上げる学生1人1人が、個を充実させることでもって集団や社会の変革的充実につなげられるような協働的学びを行うことができるようにする。また、その学びの中で学生が、スチューデント・エージェンシーを発揮し、共有された目標に向かって邁進できるようにする。そのため、基礎的なスキルを身につけられるように支援していく。そのスキルとは、よりよい方向に向かう目的を設定し、その目的実現のための目標達成に向けて、必要な行動を見出し選択していく能力である。また、能動的に働きかけて自ら学びをつくり出し、他人の判断や選択に左右されず、責任をもって判断や選択を行う。スチューデント・エージェンシーと学びは循環的な関係を持ち、学生が、教師、仲間、保護者、地域などとの相互作用のプロセスを通して時間をかけ育んでいくものとする。

### 3. 教育の方法（どのようにやっているか）

実践上の工夫

高等教育において、アクティブ・ラーニングの実践が推奨されており、どの授業でも学生主体で学ぶ場面を組み込むようにした。教育データを多面的多角的に読み取る授業では、自分の理解と解釈を、グループ内で交換し、同じデータでも異なる読み取り方があることに気づかせた。また、別の授業では、新しい関係性でグループをつくり、協働してプランを練り発表するという課題を設定した。グループによって活動の様子に差があったが、役割を分担する中で、人任せにせず自己の学びに責任を負うという意識が強化できたと考える。

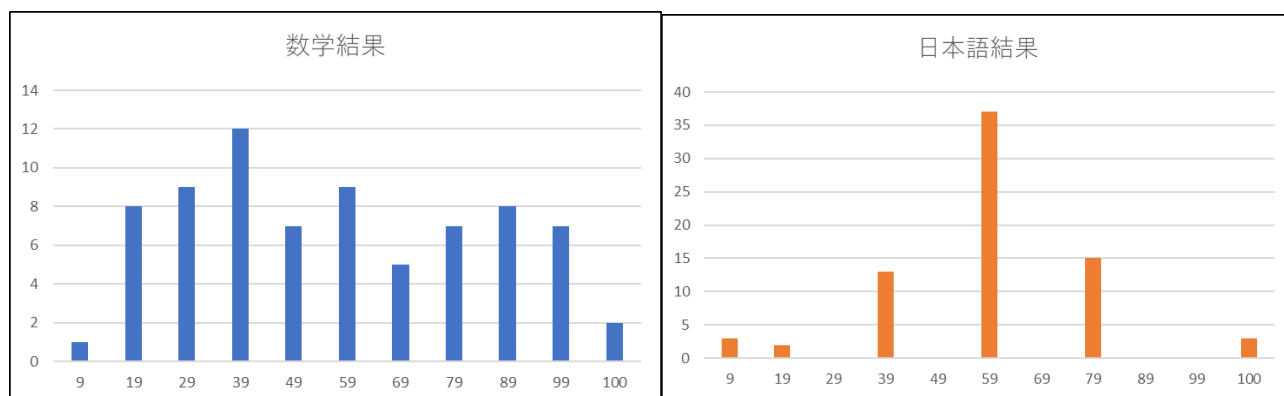
学生のニーズ・アセスメントを踏まえた上での授業改善

初回ときには学生のニーズがきちんと把握できていないため、まずこちらの計画通りに授業を行った。その後、授業時に毎回リフレクション・シートを集め、そこに書かれていることで即改善可能な面については変更していった。例えば、プレゼンの色遣いによって見えにくい場合、見やすい色やフォントに変えた。また、学生からの問いに次回必ず応じるようにした。さらに、15回の授業終了後、全体の振り返りを実施し、そのとき提案のあった事柄については、個別に学生にインタビューを行ってより詳しく聞き取り、授業改善につなげた。例えば、「ループリックの活用方法がよく理解できなかった」と言われたら、具体的な場面でどう使うか様々な授業で示し、理解が深まるようにしていった。

**4. 教育の成果（行った結果どうだったか）**

総合ゼミの主担当として、数学テスト、日本語テストを作成し、およそ3分の2の学生75名（林業体験参加者を除く）が受けてキャリア志向における現時点での2年生としての集団的学力を測定することができた。作問は、教員採用試験、SPIでのレベルを意識した。

| 基本統計量 | 数学テスト結果 | 日本語テスト結果 |
|-------|---------|----------|
| 平均値   | 50.55   | 61.89    |
| 最大値   | 100     | 87       |
| 最小値   | 5       | 34       |
| 中央値   | 50      | 62.5     |
| 標準偏差  | 26.75   | 12.11    |



この結果を見ると、数学は分散が大きく、また得点は30点台と80点台の2つの山ができています。この下の方の集団の数学の力を上げていく必要があります。一方、日本語の方は、中央値と平均値がほぼ重なっており、外れ値は少数である。この中央の集団をより高い方へと移動させていくこととトップ層の割合を高めていくことが必要であると考えます。

## 5. 教育における今後の目標（これからどうするのか）

### デジタル化に対応した教育の在り方

ポストコロナ期において、GIGAスクール構想によって拡充された情報環境を生かした新しい学校教育が求められている。タブレットやモバイル等のハンズオン型機器やデジタル教科書や電子黒板、学習支援システムによる統合型校務など日々刷新される情報通信技術の使い方の理解が不可欠である。一つ一つの機器の操作の習熟というより、より総合的な理解を深めることが重要であると考えます。卒業して現職で活躍している学生が大学に立ち寄ったとき、「実践現場ではもっと情報リテラシーの教育が必要だと思う」と示唆してくれた。その点を踏まえ、大学においてSociety5.0の時代に生き生きと学ぶ学生を育てていくようにする。

### 教育哲学の基盤

大学の教職課程で教育哲学を授業として設定することはなくても、各担当教員はそれぞれの哲学的基盤をもとに授業に取り組んでいる。その暗黙知を学生がどう受け止め、自分なりの教育哲学を構築していくかは、彼らの職業生活に大きな影響を与えるものである。それは、拠り所とする各自の理論と言い換えてもよい。その理論とは、説明や予測のための手段を理解し、説明し、予測したりすることを可能にする骨格として用いるものである。教職忌避の時代において、学生と共に教育について再考する機会を増やしたい。

【添付資料】 ※全部又は一部の現物を省略しています。

1

2

3

(2024年8月31日現在)